

糖尿病薬適正使用のためのシックデイカード使用のてびき

一般社団法人 日本くすりと糖尿病学会

1 はじめに

シックデイでは低血糖が懸念されることから糖尿病薬を休薬・減量した方がよいケースがある。「糖尿病治療に関連した重症低血糖の調査委員会報告」によると、救急搬送された重症低血糖の要因として、シックデイは11%で、食事内容・タイミングの不適合40%、薬剤の過量もしくは誤投与27%に次ぐ第3位の要因となっており¹⁾、シックデイに陥る場合には適切な対応をとることが重要である。しかしながら、シックデイルールの説明を受けていないか、説明を受けていても十分理解していない患者は散見される。シックデイ対策は薬物治療の一環であり、薬剤師から基本的な情報としてシックデイルールの必要性を説明し、普段から主治医にシックデイの対応指示を受けるように促すことが重要である。

2020年度診療報酬改定時、調剤後薬剤管理指導加算が新設された。これは、低血糖などの副作用が起こる可能性が高いインスリン製剤やスルフォニル尿素薬（SU薬）の新規処方または用法用量の変更があった際に、早い段階で副作用の発現に気付けるように薬剤交付後に薬局薬剤師が患者へ、服薬あるいは注射の状況や副作用の有無などを確認して医療機関に情報提供することが評価されたものである（施設基準等の要件もあり）。2022年度診療報酬改定では、この評価が引き上げられており、糖尿病薬適正使用のため、薬局薬剤師による投薬後の更なる薬学的フォローが期待されている。シックデイの際の服薬または注射について、薬剤師は必要に応じて医師と連携し、患者やその家族へ事前に説明・指導して理解を深めることが大切である。

なお、シックデイルール指導については、本学会適正使用推進委員会が取りまとめた「糖尿病薬適正使用のためのシックデイルール指導のてびき」²⁾を参照されたい。

2 シックデイカード作成の経緯

糖尿病患者の病態は多様であるため、すべての患者に共通したシックデイの適切な対応を見出すことは難しい。シックデイに関するパンフレットなどの資料も存在するが、患者が携帯して必要時に確認できるものは少なく、また、患者個別に対応した内容とはなっていない。また、シックデイの対応の原則として「シックデイのときには主治医に連絡し指示を受けるようにする」³⁾とされているが、主治医に連絡がとれない状況も考えられるため、普段からシックデイの対応指示を受けておく必要がある。患者が対応指示を受けていても、それを理解し、シックデイに実践できるとは限らない。

そこで、患者指導・主治医との連携のツールとなり、シックデイのときに患者自身で基本的な対応、服用量の調節を可能とするためにシックデイカードを作成した。

3 シックデイカードの目的

患者が体調を崩した時に重篤な低血糖を予防するためにも、服用量の調節を含めた内容を記載したシックデイカードを作成した。このシックデイカードは、糖尿病連携手帳やお薬手帳に挟んで携帯して、直ぐに確認して本人の理解の上で実施することが重要である。シックデイカードを用いることで、薬剤師による糖尿病薬の適正使用のための継続指導が行えること、患者だけでなく家族・医師・薬剤師・看護師・介護スタッフなど患者に関わる医療・介護職がシックデイカードを通じて共通認識を持ち、シックデイで困る患者や医療者が減ることを期待する。

4 使用方法

4.1 使用前の準備

「糖尿病薬適正使用のためのシックデイルール指導のてびき」²⁾を参照して、シックデイの対応について薬剤師が理解しておく。医師とは病院薬剤師を通じて連携できるとよいが、病院薬剤師が配置されていない医療機関の医師であっても、可能な限りシックデイルールの同意を得て、カードの運用を始めることが望ましい。使用 방법은医療機関の状況や医師の見解も考慮する。

4.2 使用方法

【薬剤交付時】

- ・糖尿病の内服薬が処方されている患者を対象とする。
- ・シックデイカードを使用して説明し、糖尿病連携手帳かお薬手帳に輪ゴムで止める。患者や家族から見て分かりやすい箇所に挟み、体調を崩した時に、このシックデイカードを見て対応を確認するよう説明する。
- ※糖尿病連携手帳とお薬手帳のどちらを利用するかは、患者・家族や医療機関の使用状況を考慮し、シックデイカードを紛失せず携帯できる、医師・薬剤師・介護スタッフ等に提示できる点を基準に選択する（電子お薬手帳利用の場合は糖尿病連携手帳を利用するなど）。
- ※シックデイカードはコピーして、冷蔵庫など日常的に使用する場所に貼っておくと、家族や介護者と情報を共有できる。
- ・【シックデイ時の食事量による糖尿病薬の調節】の〔くすりの名前〕欄と〔1日量〕欄に、糖尿病薬名（降圧薬名）と1日量を薬剤師が記入する。
- ・【糖尿病薬の調節】欄は次回診察時に主治医が記載できるよう、または薬剤師が記載することで、主治医に指示を確認したり、指示の変更がしやすくなるよう患者に説明する。



図1 シックデイカード2つ折り 外面

図2 シックデイカード2つ折り 内面

シックデイ時の食事量による糖尿病薬の調節

種類	くすりの名前	1日量	いつも通り～8割ほど摂取できるとき	普段の半分くらい摂取できるとき	ほとんど摂取できないとき
糖尿病の薬					
血圧の薬					

薬剤師が記載
主治医が確認後、記載

説明者 _____ 記載日 年 月 日 診察時に主治医に確認しておきましょう。

図3 シックデイカード2つ折り内面 糖尿病薬調節の記入欄

【薬剤交付後】

- ・シックデイカードを利用して説明を行ったこと、体調が悪くなった際の糖尿病薬の調節指示を依頼する内容の服薬情報提供書（トレーシングレポート）を医師へ提出すると、更に有効な利用が期待できる。
- ・必要に応じ電話等で服薬期間中の患者フォローを行い、医師へ報告する。

【次回来局時】

医師による糖尿病薬の調節指示が記載されているかを確認する。

A 調節指示が記載されている場合

→ 薬剤服用歴に調節指示を転記する。

B 調節指示が記載されていない場合

診察時にシックデイカードを提示していない場合

→ 次回診察時にシックデイカードを提示し、医師に記載してもらうよう促す。

診察時にシックデイカードを提示したが、調節指示が記載されていない場合

→ 一般的な減量の説明として、「糖尿病薬適正使用のためのシックデイルール指導のてびき」²⁾表1を参考に薬剤師が記載し、次回必ず主治医に確認してもらうよう患者に説明する。その際は、医師が訂正できるよう鉛筆やシャープペンシルで記載しておき、主治医の確認後ボールペンで記入し、説明者欄に署名する。

糖尿病薬の調節指示を薬剤師が実施する場合には、患者の個性や性格なども考慮に入れて一般的な減量の説明を行い、その内容を服薬情報提供書などで医師へ報告する。

【シックデイカードの内容について補足説明】

① シックデイとは？

シックデイは血糖値が大きく乱れやすいこと、食事量が減っている場合に通常通りの糖尿病薬を使用することで低血糖を起こすことがあることを理解してもらう。

② こんな時は主治医に連絡

医療機関へ連絡または受診すべき項目を挙げている。

③ シックデイ時の食事量による糖尿病薬の調節

診察時に主治医に確認するよう説明する。

[血圧の薬]の項目があるが、血圧低下によるふらつき等を低血糖症状と認識することがあり、水分摂取不良時に降圧薬の投与調節が必要となる場合があるためである。

④ シックデイ時の基本的な対応

シックデイの際の対応について普段から主治医に確認しておく。「シックデイ時の基本的な対応」は体調を崩した時に、たとえ軽い症状であったとしても心がけておきたい対応である。「こんな時は主治医に連絡」に当てはまる症状がある際はすぐに受診をするように、また不安な時は主治医または、かかりつけ薬剤師・薬局に連絡するよう説明する。

[その他補足説明]

- ・新しい糖尿病連携手帳やお薬手帳を使用する場合はシックデイカードも移し替える。
- ・糖尿病薬の処方変更があれば調節量の確認を行う。
- ・インスリン、GLP-1受容体作動薬注射剤の調節を医師から記載してもらってもよい。

4.3 低血糖予防のためのシックデイの際の薬物療法

「糖尿病薬適正使用のためのシックデイルール指導のてびき」²⁾ 表 1 参照

5 使用例

5.1 薬局にてシックデイカードに記入する場合

近隣医療機関の医師へシックデイカードの取り組みについて相談したところ、診察時に調節指示を記載する時間がないとの返答であった。

「食事ができないことがある」という糖尿病患者に対し、投薬時にシックデイカードを使用してシックデイの対応を説明した。シックデイのときの糖尿病薬の一般的な調節法として「糖尿病薬適正使用のためのシックデイルール指導のてびき」²⁾ の表 1 を参照し、DPP-4 阻害薬について、食事量が普段の半分くらいするとき、ほとんど摂取できないときは中止が可能と記載した。その内容を服薬情報提供書にて処方医へ報告したところ、DPP-4 阻害薬は食事量に関わらず服用するよう返答があったため、患者へその内容を電話にて連絡・説明した。

5.2 医療機関にてシックデイカードに記入してもらう場合

近隣医療機関の医師へシックデイカードの取り組みについて相談したところ、診察時に調節指示を記載する時間がないため、事前にカードを受け取り、記入しておきたいとの返答であった。

発熱して感染症の疑いがあった患者が、食事がほとんど摂取できなかった際に自己判断で糖尿病薬を継続していた。幸い副作用発現はなかったが、シックデイの説明を行った。服薬情報提供書に患者への説明内容とシックデイ時の服用量の調節指示についての依頼を記入し、シックデイカードを添付して主治医へ提出した。

医療機関では、次回診察日までにシックデイカードに服用量指示が記入された。診察時にシックデイ指導が行われ、カードが患者に渡された。薬局では来局時にカードを受け取ったかをたずね、改めて患者とシックデイの指示を確認した。患者が必ず持参する糖尿病連携手帳またはお薬手帳にカードを挟んで返却した。

5.3 地域連携・病薬連携を通じて

現在、医師のタスクシフトが推奨され、インスリンや SMBG の指導やプロトコールに基づく処方支援などが薬局薬剤師の役割としてより一層求められている。

病院と地域の近隣薬局の間でシックデイカードを活用する場合には、病院薬剤師との病薬連携を通じて、糖尿病の担当医師に確認し、シックデイルールを地域プロトコール化して、薬局薬剤師が記入する方法も考えられる。今後、医師と病院薬剤師と地域の薬剤師会等の研修会等により、地域連携による糖尿病患者の継続的な服薬管理支援が可能となるツールとしてこのシックデイカードが活用されることが望まれる。

6 おわりに

シックデイの対応に沿った、シックデイカードの使用についてまとめた。患者の体調不良時には主治医に相談することが基本ではあるが、それが不可能な場合に患者・家族・介護者が自身で対応し、重篤な副作用を回避できるよう期待している。日頃から患者を中心として家族、医療機関、薬剤師、介護者で連携を取り、このカードが有効に活用されることを期待する。

7 利益相反

本てびきに関して、開示すべき COI はない。

8 引用文献

- 1) J. Japan Diab. Soc. 60(12): 826~842, 2017
- 2) 日本くすりと糖尿病学会：糖尿病薬適正使用のためのシックデイルール指導のてびき、くすりと糖尿病、10(Suppl.)137-138, 2021.
- 3) 日本糖尿病学会編・著，糖尿病治療ガイド 2020-2021 文光堂

執筆	薬剤師	山本美絵（クラフト株式会社さくら薬局）
	薬剤師	廣田有紀（せいら調剤薬局）
協力	薬剤師	森 貴幸（株式会社大和調剤センター）
	薬剤師	國森公明（あかつき薬局）
	薬剤師	坂倉圭一（すこやか薬局）
	薬剤師	菅原秀樹（調剤薬局ミッテル）
	薬剤師	塚本有佳子（塚本内科循環器科）
	薬剤師	佐竹正子（クラフト株式会社）
	薬剤師	篠原久仁子（薬局恵比寿ファーマシー）
監修	医師	辻野元祥（東京都立多摩総合医療センター 内分泌代謝内科）
	薬剤師	龍岡健一（虎の門中央薬局/東京都港区薬剤師会会長）
	薬剤師	濱口良彦（関西電力病院 薬剤部）
	看護師	和田幹子（さいしょ糖尿病クリニック）

2022年7月21日

一般社団法人 日本くすりと糖尿病学会 適正使用推進委員会
委員長 朝倉俊成（新潟薬科大学 薬学部）
副委員長 小林庸子（杏林大学付属病院 薬剤部）
委員 篠原久仁子（薬局恵比寿ファーマシー）

中野玲子（萬田記念病院 薬局）

武藤達也（名鉄病院 薬剤部）